幼き恋

怜央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼き恋

【Ｎコード】
Ｎ１１８０Ｄ

【作者名】
怜央

【あらすじ】
この話は実話です。今自分の身に起きていることをそのまま書きました。書きすぎると未来に行く可能性があり、途中からフィクションになる可能性がありますｗリアルに小学生ですｗここからあらすじｗ小学６年生の怜央は好きな人がいなくて退屈していました。そんな時カレンが目に留まりました・・・実際におきていることなので、あっけなく終わるかもしれませんが、いきなり波乱万丈になったり。好きな人が変わったりと・・・・続きが予想できないような小説になっているのでどうぞ見てください

第1話：退屈から（前書き）

これはまだ実話ですw

第1話：退屈から

この話は「実話」である

主人公は怜央、小学６年生。

怜央は退屈していた。周りは恋愛の話で盛り上がってるというのに、自分は４年生の頃から好きな人がいなくて、おいていかれている感じだった。

気になる人は何人かいるのだが、「スキ」まではいかないのだ。

２００７年１１月中旬　学習発表会の練習真っ最中でもうすぐ本番というときまでは・・・・

昼休み、怜央は外は雨が降っていたので、珍しく廊下をぶらぶらしていた。

廊下に先生とカレンがいた。これはごく当たり前のことだが、カレンは「気になる人」にはいっていた。好きな人が欲しかったからか、怜央はいつもなら通り過ぎるはずの場所に行った

「なにやってんの～」

怜央はあくまでカレンが気になって近づいたことを出さないように近づいた。学習発表会で使う写真を撮っていたのだ。

怜央はカメラ越しにカレンを見た。

思ったことはただひとつ

「かわいい・・・・」

もちろん口に出したわけじゃない。思っただけだが怜央は顔に出てないかをとても気にした

「今までにこんなにかわいい人を見たことがあるか？」　そうおもった

怜央はルックスだけで人を判断する人じゃなかった。どうにかカレンに近づこうと思った

この日から、怜央の日常は変わったのだ

第1話：退屈から（後書き）

一気にたくさん書いてしまって、1回で出すとちょっと変な気がするので、分けて連続投稿いたします。

第2話：好きなのかな？（前書き）

ここもまだ実話です

第2話：好きなのかな？

次の日から、怜央はカレンのことを気にしていた。カレンのことを知りたいと思ったのだ。しかし、カレンは隣のクラスだ、しかもしゃべったことは2，3かいしかないだろう

もうすぐ6年生も終わる。だから怜央はまず、同じ中学にいけるかどうかが気になった。それで、隣のクラスで受験する、頭がいい、龍平に聞くことにした。龍平とは仲がいいけど、このことはしられたくないと思い、遠まわしに聞いた。

「ねぇ、龍平。そっちのクラスで受験する人って龍平と誰？」

怜央はこの質問が一番いいと思った

「あぁ。俺と光輝と・・・・そんぐらいかな」

「へぇ・・・ありがと」

怜央はこの言葉を言ってから、無愛想だと気づいたが訂正できず。とりあいずその場から去った。

次の日からは、近づくために努力しようと思った

運がよく、カレンと同じ班に親友の浩二がいたので相談しようかと考えた

だが、まだカレンのこともよく知らず、本当に好きかどうかもわからないので、後にすることにした。

その日から掃除の時間は、自分のところを早く終わらせてカレンのクラスの掃除を手伝うことにした。　掃除は班ごとにするので、浩二がいて助かったと思っている。

そのおかげで、会話が少し増えた。
会話は
「ありがとう」
「いいよべつにw」
など一言づつだったがどんどんカレンのことが好きになってきた。

カレンのことを見ていると、カレンは怜央の親友の有斗のことが好きなんだと思うようになってきた。
周りが恋愛の話で盛り上がっているので、そういううわさは聞いていたが、自分の目で見ると少しショックを受けた。

これをきっかけに浩二に相談することに決めた。怜央が今までしてきた恋愛の話とともに

第2話：好きなのかな？（後書き）

後1回連続投稿します

第3話：迷惑な相談（前書き）

まだ実話です

第3話：迷惑な相談

「なぁ浩二・・・・相談に乗ってくれないか？」
親友といえど、こういう話をするのは緊張した。

「あー・・・ひさしぶりだなw最近相談に来ないからどうしたのかとw俺よりさきに誰かと付き合っちゃったのかと疑っちゃったよw」
この言葉に、怜央はリラックスできた。

「あのさ・・・・俺好きな人できたんだ・・・」

「よし！えらい！これでお前も時代の流れに乗ってきたなw」
まじめに聞いているのかどうか、疑わしかったが、浩二はいつもこうなので話を続けた。

「おれって恋愛の神様から見放されてるんだよなぁ・・・だってさぁ・・」
続きを話そうとしたそのとき

「まったぁぁぁ！」
浩二がとめた

「その話はもう何回も聞いてるからやめてくれw月1回は聞いてるぞw」

「・・・じゃぁ簡単にいくねw」

怜央はいつもこうやって言うが、いつもまったく同じ内容を喋っている。一文字の狂いもなく

「おれは1年生のときに好きだったやつがいたんだよ。そのときは俺片思いだと思っていて2年生のときに諦めたんだ。そして3年生のときに違うやつを好きになったんだよ。まぁ関係ないけど3年のときにラブレターもらったさー。いーでしょー」

いつもの自慢が入ってきた

「わかったわかったいいですね、すごいですね！」

浩二はあきれて、子供をあやすようにいった。

「つづけるよー　　それで3年生になって好きになったやつに4年のときに告白したんだよ・・・返事はしてくれなかった・・・それで俺は諦めたんだよな・・・これでおわりじゃないんだぜ・・1年生のときに好きだったやつに6年生になってから告白されたんだよ。「1年生のときから好きでした」ってな・・・・ふったぜ・・・・・そしてなんかうわさでは3年生のとき好きだったやつも俺のことをすきとか言うようなうわさが・・・・・　俺も見た感じそうかもって思うけど・・・・・まぁ要するに俺が好きだったやつは俺が好きじゃなくなってから俺のことを好きになるってことよ」

浩二は少し間をおいていった

「簡単にしてないじゃんw」

「んじゃありがとう。またそうだんさせてねー」

浩二は思った「相談じゃなくて俺が聞いただけじゃん」と・・・口

には出さなかった

第３話：迷惑な相談（後書き）

連続投稿終了

たぶん第４話で１１月２６日になりますｗ

第４話：どうでもいいことでも（前書き）

今回は今までのと比べるとちょっと長めです。
まだリアルにあった話ですｗ

第４話：どうでもいいことでも

どうでもいいことでも・・・・・・

どうでもいいことでも好きな人となら、最高に思える。

たわいもない会話、お互いに笑うこと　それぐらい当たり前なのかもしれない。でも、好きな人とだと、「当たり前」が「恥ずかしい」と感じてしまうこともある

１１月２６日　怜央がどうでもいいことでも最高に思えたた日であった

いつもどうり、退屈の１，２時間目をすごし　最高に中休みがきた。授業が終わるとすぐに教室から出た。そして隣のクラスへすぐ入った。

この行動は、もう毎日のようにやっているので、誰も不思議がらないカレンとしゃべれなくてもいい、ただ・・・見守ってあげれるだけで怜央はうれしかった

そしてまた退屈な３，４時間目

昼休み・・・・最高の時間になった

怜央はその日は給食当番で、掃除がなかったのでいつもどうり手伝いに行くことにした。

まだ給食中だったが、先生にばれないようにそっとドアを開けた。

まず目に入ったのは、浩二だ
もう少し開けるとカレンが目に入った
それぐらいのことでは、もう動揺することはなくなったのだが・・・

カレンが怜央に向けて微笑みながら手を振った

怜央は直後先生に見つかったので、ドアを閉めた
ここでドアを閉めていなかったら、気絶していたかもしれない・・・
・と思うぐらいかわいかった。

「まじかよ・・・・・」

何とか動揺しないように掃除を始めた。
前半は何事もなく普通に掃除をしていたのだが、終わる直前。カレンが掃除箱を見ていたので気になって

「なにみてんの？」と声をかけた。

「数字おぼえてるの」

掃除箱のドアには、回転ほうきや、モップの数などが記されていた。

「１２２１１２１１、１２２１１２１１・・・・・」

カレンはその言葉を繰り返した。
怜央はそれをチャンス（？）と思い自分も覚えた。
「おれもおぼえよっと・・・・１２２１２１１、１２２１２１１１・・・・」
これを話題に、少しの間はなしができると思ったのだ。
これが、初めてカレンとはなしたまとも（？）な会話だと思う
放課後も、それを覚えているか確認した。
「カレン。１２２１２１１まだ覚えてる？」
この言葉を言うのにも、かなり緊張した。
「覚えてるよ。１２２１・・・２１１だよね？」
この途中で考えるしぐさが、またかわいかった
「わすれんなよ。」
怜央はこの数字がなくなったらカレンとの話題がなくなると思った。
まだ話したかったが、他の人もいて話しかけられたのでそこで話は途切れてしまった。
「１２２１２１１・・・・俺はぜってぇわすれねぇぞぉー」
怜央は他の人に聞こえないように、小さな声でつぶやいた。

怜央にとって、この日は今までで一番最高に思えた一日だった

第４話：どうでもいいことでも（後書き）

やっべぇ・・・今日２７日だよｗ今書いたこと昨日の話しだよｗ未来にいきそう・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1180d/

幼き恋

2010年12月10日14時51分発行